

## 原著

# 被支援者から支援者へ

## — 外国ルーツの人々のコミュニティでの活躍

田 中 真奈美<sup>1)</sup>

From Recipients of Support to Supporters: Foreign-born Residents Playing an Active Role  
in the Community

Manami Tanaka

### 要 約

本研究は、日本における外国人住民の定住化に伴い、外国ルーツの二世・三世が地域社会において「支援者」として活躍する事例に着目し、その語りを通じて支援活動の動機、経験、課題の変容を明らかにすることを目的とした。調査対象者は、A県B市の国際交流団体に勤務する外国ルーツの正規職員であり、ライフヒストリー法を用いた聞き取り調査を実施した。

結果として、支援活動への動機には自身の経験や家族の価値観が影響しており、支援を通じて外国ルーツの子ども達に肯定的な自己認識を形成してほしいと考えていることが示された。また、支援活動には制度的な課題も存在するが、ロールモデルが機能することで、外国ルーツの子ども達の学習意欲や進路形成に好影響を与えていることが明らかとなった。

本研究は、外国ルーツの支援者の語りを通じて、多文化共生社会の実現に向けた実践的知見を提供するものであり、教育政策や地域支援のあり方に対して重要な示唆を与える。

キーワード：外国ルーツ、地域参加、支援者

### 1. はじめに

1990年に「出入国管理及び難民認定法第七条第一項第二号の規定に基づき同法別表第二の定住者の項の下欄に掲げる地位を定める件（法務省告示第132号）」が告示され、日系三世まで定住者ビザが取得できるようになり、「出稼ぎ」のために来日する日系ブラジル人をはじめとする外国人が増加した。また、2016年11月28日に「外国人の技能実習の適正

な実施及び技能実習生の保護に関する法律（技能実習法）」が公布され、2017年11月1日に施行され、技能実習生として来日するベトナム人が増加した。

リーマンショックの影響で、一時的に在住外国人数は減少したが、再び増加傾向になり、新型コロナウイルス感染拡大により、再度一時的に在住外国人数は急激に減少した。その後、日本に在住する外国人数は年々増加傾向にあり、その背景や滞在形態なども多様化している。日本に在住する外国人の増加と

1) 田中真奈美 東京未来大学モチベーション行動科学部 (Tokyo Future University) tanaka-manami@tokyomirai.jp

長期化・定住化に伴い、日本生まれの二世や三世が誕生し、外国ルーツの人々の地域参加が進んでおり、地域の特徴に合わせて、様々な活動が行われている。

本研究では、A県B市の外国人の支援活動をしている団体で、正規職員として勤務している外国ルーツの松田氏（仮名）を事例として取り上げ、支援者となった背景や課題について考察する。

## 2. 在住外国人に関する研究

### 2.1 在住外国人の諸課題

在住外国人数の増加に伴い、様々な領域で多様な研究がおこなわれている。中嶋（2025）は、在住外国人の生活課題について、1）相談先がわからないという課題、2）日本語の問題、3）就学の問題、4）医療サービスへのアクセス問題、5）居住確保の課題、6）就労の問題を挙げている。これらの課題の解決のために、コミュニケーションが重要であることを述べている。

井澤・上山（2017）は、持続可能な多文化共生について、在日インド人人口が急増した江戸川区西葛西を事例に調査した。区の政策に頼らず、江戸川インド人会が中心となってコミュニティが形成されたことが明らかとなり、宗教施設や教育機関が共生の場として機能していることがわかった。

森田他（2021）は、医療アクセスが困難な在住外国人の特徴、アクセスの抑制因子、および効果的な支援方法を検討することを目的とし、関東圏に住む522人の外国人を対象とした医療利用に関する横断研究データを二次利用した。その結果、社会・経済的理由と受診抑制とが関連していたことを明らかにした。

これらの研究は、それぞれ異なる視点（医療、地域共生、生活課題）から在住外国人の課題を明らかにしているが、共通して「情報の届きにくさ」、「制度の壁」、「地域との関係性」が主要な障壁であることを示唆している。

このような課題に対する一つの有効な解決策として、外国ルーツの人々自身が支援者となることが挙

げられる。彼らは、言語や文化、制度に関する経験を共有しており、同じ境遇にある人々のニーズを深く理解できる立場にある。

### 2.2 外国ルーツの人々の地域参加の研究

小島（2022）は、ブラジリアン・コミュニティ通訳者サポートの会代表の大島氏をインタビューした。20歳の時に来日し、様々な経験を経て、ブラジリアン・コミュニティの支援者となった経緯についてまとめている。

田中・馬場（2023）は、支援活動をする外国ルーツの人の事例として、岐阜県可児市のコミュニティ通訳と京都市伏見青少年活動センターの取り組みを紹介し、支援者として後から来日した外国ルーツの人々をサポートするケースは増加傾向にあると述べている。

田中（2025）は、静岡県浜松市のCOLORSの活動を紹介している。現在の活動メンバーは、全員が日本生まれの外国ルーツの大学生や社会人である。目的は、同じ境遇の外国ルーツの子ども達にライフストーリーを語り、自分の色colorを見つける手助けをすること、進路・就職情報提供を行うこと、外国ルーツを持つ人々の存在や活躍を外部へ発信することである。活動拠点は、浜松市多文化共生センター等である。

これらの事例は、外国ルーツの人々が支援者として活躍する可能性と、その社会的意義を具体的に示している。来日経験を持つ人々が、自らの体験を活かして同じ境遇の人々を支えることで、情報の届きにくさや制度の壁を乗り越える支援が可能となる。また、日本生まれの外国ルーツの若者達が、自らのアイデンティティを活かして活動する姿は、次世代の多文化共生社会の担い手としての希望と可能性を示している。これらの取り組みは、支援の受け手から担い手への移行を促し、より包摂的な社会の形成に寄与するものである。

### 3. 研究目的

近年、日本における外国人住民の数は増加傾向にあり、長期滞在から定住へと移行するケースが増えている。これに伴い、外国にルーツを持つ二世・三世の子ども達が地域社会において存在感を高めている。彼らは日本語と親の母語の両方に通じ、文化的な二重性を持つ存在として、学校や地域での支援活動に関わるようになってきた。

従来、外国人住民は「支援される側」として位置づけられることが多かったが、近年では、外国ルーツの人々が「支援する側」として活躍する事例が増えている。このような役割の転換は、彼ら自身のアイデンティティ形成や社会的主体性の獲得に深く関わっており、多文化共生社会の実現に向けた重要な動きといえる。この点について、永井（2015）の研究からも、幼い頃親と共に来日し、日本で成人した新華僑二世は中国と日本が融合した複合的なアイデンティティを持ち、自らのアイデンティティをポジティブに捉え、それを強みと考え、日本社会で活かしたいと考えていることが明らかとなっている。

しかし、彼らの支援活動の動機や経験、課題については、十分に捉えられておらず、当事者の語りを通じた実証的な研究が求められている。

そこで、本研究では、外国ルーツの人々が地域社会において支援者として果たす役割とその背景、課題を明らかにすることを目的とし、次の3つの問いを立てた。

1. 外国ルーツの支援者は、どのような動機や背景から支援活動に関わるようになったのか（背景）
2. 支援活動を通じて、支援者のアイデンティティや社会的役割はどのように変容しているのか（役割）
3. 支援者の語りから、多文化共生の実践における課題と可能性はどのように見えてくるのか（課題）

外国ルーツの支援者の語りからこれらの点を分析し、考察した。

### 4. 研究方法

本研究では、外国人住民が比較的多く在住するA県B市を調査対象地とした。調査対象者は、同市の国際交流活動・支援団体に正規職員として勤務する外国ルーツの人物である。

#### 4.1 調査対象者

松田氏（仮名）は、家族とともに幼少期に来日し、日本語を習得した外国ルーツの人物である。家庭内では両親の母語を使用しながらも、日本語を学び、日本の大学へ進学した。自身の経験を活かし、現在は支援団体で外国ルーツの子ども達への支援活動に従事している。母語と日本語の両方に堪能なバイリンガルである。

#### 4.2 調査手続き

2023年8月、A県B市にて松田氏に対して約90分間の聞き取り調査を実施した。調査は半構造化面接の形式で行い、主な質問項目、1）来日の経緯、2）日本語の学習方法と習得、3）支援する側になってからの経験等について自由に語ってもらった。

#### 4.3 分析方法

本研究では、個人の語りを通じて経験や価値観の変容を探るため、ライフヒストリー法が適切と判断し、採用した。ライフストーリー研究は、研究者が個人へのインタビューを通して語り手に固有な個人的な経験を聞きながら、そのインタビューをもとに、抽象化や一般化の作業を経て、人々のアイデンティティのあり方や文化・社会現象を描き出すことである（桜井, 2006, p75）。また、桜井（2002）は、変動する社会構造の個人に照準している点は、ライフヒストリー法の特徴の一つであると述べている。

録音した音声データは逐語的に書き起こし、調査対象者による内容確認を経て、語りの中から人生における重要事項を抽出し、分析を行った。

#### 4.4 研究手順

1. 調査対象者に研究の趣旨とライフヒストリー法の概要、倫理的配慮について説明し、同意を得た。
2. 先行研究に基づき、質問項目を作成した。

- 3.2023年6月に半構造化面接を実施し、会話を録音した。
  - 4.録音内容をすべて書き起こし、2024年2月に調査対象者による確認を行った。
  - 5.不明点について、メール等で追加の質問を行い、内容の精度を高めた。
  - 6.質問項目に基づき、語りの中から重要事項を抽出し、分析・考察を行った。
- なお、本研究における利益相反に関する開示すべき事項は存在しない。

## 5. 結 果

本研究では、外国ルーツの支援者による語りに焦点を当てることで、支援活動に関与する過程や背景、活動の中で直面する課題に関する具体的な知見が得られた。以下では、調査対象者である松田氏の語りを中心に、支援者としての経験とその意味を整理し、分析結果を示す。

### 5.1 日本語習得の課題

松田氏は幼少期に来日した。来日前は、幼かったこともあり、母国では日本語を話したことはなかったそうである。来日後、日本の幼稚園へ入園し、自然な会話を通じて日本語を習得した。「日本の幼稚園に入ったので、大体はそこで会話は覚えてたっていう感じはありますね」と当時の様子を述べてくれた。また、「普通に友達、幼稚園の友達とは会話していたので、すぐ覚えられはしたのかなっていう感じはしますね」と日本語の会話の習得に無理のなかった様子を話してくれた。

来日以降、家庭内では母語を使用していたが、語彙力に関しては、現在は日本語の方が優位であると述べている。

小学校は当初外国人学校に通っていたが、両親が日本での永住を考え始めたため、小学校6年生の時に、日本の学校へ転校した。その小学校には、外国ルーツの子ども達がほとんどいなかった。その際、生活習慣の違いにカルチャーショックを受けた。「特に委員会あるじゃないですか。あれが外国人学校は

なかったので、何かいらん仕事を任されて、なんか面倒くさいなみたいな感じが、すごくありましたね」と特に委員会活動の存在に強い違和感を覚えたという。小学校に上手く適応できなかったこともあり、1年も経たないうちに、再び外国人学校へ転校した。

日本における外国ルーツの子ども達に対するいじめの問題は、関連する研究や報告において頻繁に取り上げられている。この点について、小学校時代の友人の経験を振り返りながら、「一定数は、いると思う。やっぱり特に他に外国人がいないところだと多いのかなっていうイメージですけど。また、子どものいじめは、結構陰湿だし」と語ってくれた。

外国人学校の最終年度終了後、日本の中学2年生の3学期に国際教室のある学校に転校した。その学校は、外国人生徒への支援体制が整っていたため、漢字や文法の習得が進んだ。漢字の習得について、「わざわざ漢字の勉強っていうのはしなかったです。やっていく中で、無理やり覚えていくしかないのです。自然と必要なものは身についていったという感じがすね」と漢字の習得について語ってくれた。現在も「書くのはまだ自信ないですけども、ある程度はだいたい読めるかな」と漢字の理解度について述べてくれた。

「元々ゲームとか日本のアニメとか好きだったので、会話力と日本語力という面では、問題はなかったですね」とクラスメートや友人とのコミュニケーションには問題がなかった。

高等学校は、地元の学校へ進学した。「卒業した先輩だとかでも、外国の人はいたみたいですけども、基本的にはもう日本人だけ」という学校で、中学校とは違う環境であったという。

松田氏の語りからは、日本語習得や学校適応において、環境と周囲の支援が重要な要因であることが示唆された。

### 5.2 大学進学の動機と過程

大学進学をする人は、外国ルーツの若者にとって依然として少数派であり、筆者が聞き取り調査した群馬県大泉の調査協力者も「(外国ルーツの)友人

の中で大学進学したのは、自分だけだった」と語ってくれた。

進学の動機としては、「勉強が好きだったこと」、「親の希望」、「大卒資格による就職のメリット」が挙げられた。

松田氏は、親の希望が一番影響したという。「もともとやっぱり親が大学行ってほしいって言うことずっと言っていて、それが、多分1番影響は大きいかなと思います。まだ仕事は正直したくなくて、勉強の方が好きだったんですね。だから、まだ勉強したいなって思ったし、大卒の資格があれば、もうちょっといい仕事だったり、給料が上だったりというメリットの方が多いと思ったので、大学行こうと考えました」と進学を決めた理由を語ってくれた。

進学に向けた準備としては、高等学校の合宿型支援プログラムやNPOによる進学支援教室に参加し、学習に集中した。高校時代は部活動と勉強に専念し、遊ぶ時間はほとんどなかったという。「私が行った高校のコースが、大学進学を目指そうって集中勉強する、結構勉強に力を入れてるところだったので、そこでだいたい鍛えられて。その学校は、勉強合宿とかもやったりとかするところだったので、だいたいそこでやってたのと、後は学習支援教室のある団体に通わせてもらったりして、勉強はしてたって感じですね」と語ってくれた。

### 5.3 大学生活

大学では、ドイツ語を専攻した。その理由として、「リーマンショックがあったじゃないですか。リーマンショックがあって、やっぱり外国人家庭って、かなりもろに打撃を受けて。私ももともと親戚がこら辺いっぱい住んでたんですけど、やっぱり、みんな母国に帰っちゃう。そういう、かなりのレベルでの生活に影響が出てしまったというところで、やっぱりちょっと経済に敏感にならないと、この先、生き残れないんじゃないかって考えた時に、あのリーマンショックのさなか、確かドイツが結構安定してたんですね。諸外国は結構みんな軒並みダメージ受けたんですけど、ドイツだけは結構まだ全然大丈夫っ

て感じだったから、ドイツを学べば自然とそういった経済の流れがわかるんじゃないかみたいな考えで、ドイツ語って感じでしたね」と語ってくれた。

第二言語である日本語の学習経験が、第三言語であるドイツ語習得に及ぼした影響について、「特に役に立ったことはなくて、むしろ弊害は大きかったかな。(中略)ドイツ語の発音がラテン語系だってすごく言われました。ラテン語の発音になっちゃうっていうのも、ずっと私だけずっと言われ続けて。やっぱりドイツ語結構母語に似ている単語だとか、そういうのもあるので、結構混乱があったりとかはありましたね」と語り、デメリットの方が大きかったそうである。第二言語(L2)を習得した経験が、第三言語(L3)の学習に有利に働くことは、言語習得研究でも広く認められていることであるが、松田氏の場合、有利にはならなかった。

「経済的に厳しかったので、大学、奨学金借りたりだとかしてて、自分でバイトもしてやってたんですけども、基本的に本当に勉強とバイトだけをしてた。バイトちょっとやりすぎたなっていう後悔がすごくあります。バイトを三つ掛け持ちしてて、終わってからバイト、後またバイト、違うところで真夜中の2時ぐらいまでバイトして、土日また違うところでフルで朝から夕方までバイトしてって感じでした。もっとその時間を勉強に当てた方が、有意義だったなっていうのはすごく思いますね」と語り、多くの外国ルーツの子ども達同様経済的に大変であったことを語ってくれた。

このようにアルバイトによる時間的制約が存在する状況下において、学習時間の確保について、「時間割としてクラスは、毎日あるわけではないので、そういう空きの時間だとか、あとその授業の合間の時間だとかを使ってって感じです。(中略)テスト前とかは確かに苦労はしたし、あまり点数取れなかった科目もまあありましたね」と語り、工夫していたことがわかる。

大学でのサークル活動については、「サークルはやってなかったですね、最初ちょっとやったんです

けれども、やっぱりバイトで忙しくなっちゃって、ボランティアサークルでしたが、いろんな所に行ってボランティア活動するっていうところでした。でも、私はその1回きりしか参加できずに、バイトの方にシフトしてっちゃったんで、本当に1回だけって感じでした」とバイトと勉強以外、他のことは時間的にできない生活であったことを語ってくれた。

#### 5.4 支援者としての経験と課題

現在、松田氏は母語を活用しながら、外国ルーツの子ども達への進学支援やイベント企画に携わっている。聞き取り調査時は、就職して4年目であった。母語を使用する頻度について、「結構ありますね。もともとメインが窓口の相談員なので、基本的に何か困りごとだとか、問い合わせだとかに関しては、母語を使って対応することは、ちょくちょくあります」と語った。

進学支援教室では、カリキュラム作成や教員確保等の課題があると述べている。カリキュラム作成の難しさについて、「毎年やっぱり子ども達の感じが違うんですね。レベルも全部違うし。一つに決めてしまうと、中にそれについていけない子が出てくる」と課題を語った。

教員の確保については、「良い方が見つからないことや、なかなか1人の方が長くいてくれないこと。生徒との相性だとか、教え方だとかなどですね」と語り、多様なニーズに対応できる経験のある教員には長く勤めてほしいが、難しさもあるという。現在、教室の持続可能性を考え、カリキュラムの作成を含め、マニュアル化を検討しているという。

多くの生徒は、1年間の勉強で高等学校に進学しているが、2年間、在籍する生徒もいるそうである。外国ルーツの子ども達の中には、入試等が比較的に難しいため、定時制に進学する生徒も多い。しかし、課題もある。「ある定時制の高校は、留年するぐらいだったら、退学っていうシステムみたいで。やっぱり結局、辞めちゃった子がかなり多いです」と高校進学の難しさを語ってくれた。退学後、別の学校へ転校する生徒は少なく、就職するケースが一番多い

という。

入試形態として、日本人と同じ入試枠で受験する生徒もいれば、外国人枠で受験する生徒もいるという。その理由について、「外国人枠っていうのがあるので。テスト内容は普通のと変わらないんですけど、要は科目数が減る。理科と社会をやらなくていい代わりに、面接があるっていうシステムがあるので、それを使ってテストを受ける子は、中にはいます。(中略)みんな大変だと思いますけど、なんだかんだいって、受かっていく。受かりますね。元々、本当に問題はあくまで日本語の問題であって、数学だとか、あと特にフィリピンの子だと、英語はほぼ満点取るので、そこで、結構点数取れていけるっていうパターンもありますね」と語ってくれた。

生徒のモチベーション維持のため、スポーツディや浴衣の着付け等のワークショップを実施し、学習以外のイベントを通じての社会見学を重視している。「今年は(世界の国のことが学べる)施設に社会見学行った」と毎年工夫を凝らしていることを述べてくれた。

現在、支援教室に通学している生徒について、「ちょっと難しいですけど。違うんだらうなって不思議に思うのが、私はやっぱり野望があったじゃないですけれども、勉強をしっかりとがんばって、ついていって、大学入って、いい仕事についてみたいなそういう為に勉強頑張ってたんですけど、意外とこの教室に来る子ってそこまで勉強がんばる子がなくて。なんでだろうって、なってるのが正直なところ」と自身との違いや外国ルーツの子ども達の変化について語ってくれた。

松田氏は、「目標がないと勉強への意欲が続かず、キャリアパスが描けない」と語り、特に15から16歳で来日した子ども達が日本語の習得に苦戦し、進学を諦めるケースが多いと指摘している。帰国しないという前提であったとしても、日本で頑張ろうという気持ちになる生徒もいれば、ならない生徒もいるそうである。その差について、「本当にまだ手探り状態というところですよ。思うように勉強が進まないって

うのもあると思うし、やっぱり周りに比較できる相手がいないからっていうのもあるかなと思うんですね。例えば、高校進学はこれぐらい本当は勉強しないと受からないんだよっていうところを見る相手がいない。本来自分達の年齢の日本で暮らしてる子は、こんな感じだってことを見る機会がないので、そこが1つの原因ではあるのかなって思うことはあります」と述べてくれた。

また、「周囲に比較対象がいないことが、学習意欲の低下につながっている」と述べ、大学生との交流授業等を通じて将来像を描く機会の重要性を強調している。生徒のモチベーション向上のため、団体のプログラムとして、大学生との交流等様々な方法で目標を持てるように工夫している。「今年は（新型コロナウイルス感染拡大の影響で）その機会がなくなっちゃったんですけれども、日本の大学生との交流授業とかやったことがあるんですね。それがやっぱりあると、かなり子ども達のモチベーションが変わるんです、上がって。めちゃくちゃ日本語に対する、学ぶ姿勢に対する感じがすごくよくなったりとかするんですよね」と将来像が見えてくることの重要性について述べてくれた。

最後に、松田氏は、「子ども達には自分のルーツに誇りを持ち、希望する職業に就いてほしい。将来、日本で活躍する人材になってほしい」と語り、支援活動に込めた思いを述べた。

## 6. 考 察

本研究では、外国ルーツの支援者である松田氏の語りを通じて、支援活動に至る動機、社会的役割の変容、多文化共生の可能性を明らかにした。以下では、3つの研究の問いに沿って考察を行う。

### 6.1 支援活動への動機と背景

松田氏の語りからは、個人的経験と家族の価値観が支援活動への動機形成に大きく影響していることが示された。特に、日本語習得や進学における困難を乗り越えた経験が、同様の境遇にある子ども達への共感と支援意欲につながっている。これは、先行

研究（田中・馬場, 2023; 田中, 2025）においても指摘されているように、当事者経験が支援者としての主体性を育む重要な要素であることを裏付けている。

### 6.2 アイデンティティと社会的役割の変容

松田氏は、支援活動を通じて自身の外国ルーツを肯定的に捉え直し、社会的役割を再構築している。日本語と母語のバイリンガル性を活かした支援は、文化的仲介者（cultural broker）としての機能を果たしており、地域社会における多文化共生の実践に貢献している。これは、個人の経験が社会的影響力へと転換されるプロセスとしても理解できる。この点については、本調査では、十分聞き取ることができなかったため、継続の調査が必要である。

### 6.3 多文化共生の課題と可能性

語りからは、支援活動における制度的課題（教員確保、カリキュラム整備）や、外国ルーツの子ども達のモチベーション維持の困難さが浮き彫りとなった。一方で、大学生との交流やイベントを通じた目標設定の支援は、学習意欲の向上に寄与していることが示された。これは、支援者自身が「ロールモデル」として機能する可能性を示唆しており、今後の外国ルーツの子ども達の教育政策においても注目すべき視点である。

## 7. おわりに

本研究は、外国ルーツの支援者による語りを通じて、支援活動の動機、経験、課題、そして社会的役割の変容を明らかにした。松田氏の事例は、外国人住民が「支援される側」から「支援する側」へと転換する過程において、個人の経験が社会的資源となり得ることを示している。

このような支援者の存在は、多文化共生社会の実現に向けた重要な実践知を提供しており、教育現場や地域政策においても積極的に活用されるべきである。

今後は、複数の事例を対象とした比較研究の実施に加え、外国ルーツの子どもを支援する実践者の語

りを、教育関係者や行政担当者と共有するための制度的枠組みの構築が求められる。なお、本研究においては対象者が1名に限られていたため、知見の一般化を図るには限界がある。したがって、今後は外国ルーツの支援者に対する聞き取り調査を継続的に実施し、より多様なデータの収集と分析を進めていく必要がある。

注) 本論文は、2023年日本比較文化学会第46回大会での報告をもとに、再分析・考察したものである。

## 引用・参考文献

- 井澤和貴・上山肇 (2017). 地域社会における在日外国人との持続可能な多文化共生に関する研究：東京都江戸川区西葛西を事例として 地域イノベーション Vol.9 109-118 法政大学地域研究センター
- 小島祥美 (2022). 第34回移住者のパイオニア 移住者と連帯する全国ネットワーク Migrants Network Vol.222

3-5

- 桜井厚 (2006). 第2章 ライフストーリーの社会的文脈 能智正博・編 〈語り〉と出会う 質的研究の新たな展開に向けて 3-116, ミネルヴァ書房
- 桜井厚 (2002). インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方 13-17, せりか書房
- 田中真奈美 (2025). 地域に根差した外国人支援—各地の国際交流協会等の活動の比較から— 公共と文化 Vol.3
- 田中真奈美・馬場智子 (2023). 外国ルーツの人々の地域参加 浜松市と京都市伏見区の事例から 多文化関係学会第21回年次大会 抄録 36-39
- 中嶋裕子 (2025). 日本の在留外国人の生活課題とその対策 福祉健康科学研究 (20)
- 永井智香子 (2015). 「【新華僑二世】のアイデンティティを探る」 多文化関係学 12巻 3-20.
- 森田直美・金森万里子・能智正博・近藤 尚己 (2021). 日本の在住外国人における医療アクセスが困難な人の特徴とアクセス抑制因子および効果的な支援策に関する混合研究 国際保健医療 Vo.36-3 107-121

(たなか まなみ)

【受理日 2025年11月19日】